

意見交換

1. 最近の学校の主要動向の報告

(佐々木委員)

卒業予定者の進路のうち、就職内定の内訳で県内とあるのですが、新居浜市内となるとどのくらいになるのですか。

(森澤校長)

これはいつもお叱りを受けるのですが、就職する大半が、大企業といいますか、東京、大阪に行っておりまして、県内も含めまして地元に残る学生がだいたい2、3割程度です。年度により差はあろうかとは思いますが、そういうことで、もう少し地元に残るようにしてはくれないかというような話を聞くこともございます。例えば、佐々木委員が理事長をされている東予産業創造センターでプラントメンテナンス事業を行ってらっしゃるので、そういうものに参加して、地元に残る学生も増えればと、努力をしておるところですが、就職自体について、なかなか強制はできませんので、そういう意味では、ご迷惑をおかけしているところではありますが、よろしくお願いいたします。

(佐々木委員)

これはおっしゃるとおり、市内の地域、企業に魅力がないとのことかもしれないので、学生だけの問題ではないのですが、市内の求人はあるのですね。

(森澤校長)

それは、かなりございます。

(小松議長)

求人が増えているのは、県内、県外どちらが多いのですか。

(森澤校長)

それは、両方増えております。

(谷口副校長)

佐々木委員からの問い合わせですけれども、市内の企業の方々といろいろお付き合いさせていただいているのですが、その方たちからも、高専の卒業生はなかなか新居浜市内の企業に来てくれないとの声を聞くのですが、市内への就職を希望する学生はいます。ただ、中小企業を選ばないという傾向はあります。ですから、希望先としては、住友と名前の付いた企業、地元の企業でも、中堅の企業でOBが何名か既に就職している企業に就職希望者が偏っているという状況であります。

(平田委員)

国際交流は、3年目になりますが、何か成果等ありましたら教えてください。

(早瀬国際交流推進室長)

国際交流は、平成18年度に上海、19年度にシカゴ、本年度はオーストラリアに行っております。オーストラリアに行ったのは、主に、しっかり英語を勉強してもらう動機付けとして現地大学で英語の授業等を行ったのですが、1週間程度の研修旅行ですので、それほどの英語の上達はその場では望めないだろうと、ただ、現地でホームステイをしたりし、いろいろな人たちと交流をすることにより、英語でコミュニケーションする楽しさや、もっと英語を勉強しておかないといけないという自覚をしてもらう機会にはなったようです。

来年度につきましても、今回、国際交流協定を結びましたので、オーストラリアの方へ研修旅行を予定しております。その後につきましても、また、アジア圏の方にも候補地がありますので、そちらの方にもと、今から計画しているところです。

2. 前回運営諮問会議のフォローアップ報告

(黒木委員)

国際交流については、さまざまな活動を行っているというお話ですが、サザンクロス大学は同じような技術系の大学なのでしょうか。あと、大学との協定を結んでおられるということなのですが、具体的にはどういうことをなさっているのですか。

(森澤校長)

残念ながら、工学部はない大学となっております。サザンクロス大学は、3つほどの分野に分かれていて、アート関係やビジネス・ツーリズム&インフォメーションテクノロジー、ヘルスなど看護学、環境科学などといったものもございます。新居浜高専と関係があるという意味では、情報科学、一般教養のスポーツ、語学関係、環境、生物などといった分野で共通しているのかと思います。

(平田委員)

国際交流協定を結んでいるのは、オーストラリアだけではなくて、ほかにもあるのでしょうか。

(森澤校長)

国際協定を結んだのは、初めてでございまして、それまで、上海電力学院やシカゴのイリノイ大学で、そのような話をさせていただいたのですが、先方が乗り気でないということもございまして、差しあたり結ばせていただいたのは、サザンクロス大学が初めてでございまして。他の高専では、結構結んでいるところが多く、そういう意味では、私どもは、遅ればせながら結んだという感じでございます。

(加藤 青野委員代理)

国際交流というものは、今後とも非常に大事な分野だと思うのですけれども、今後の国際交流の方向性についてどのように考えておられるのかお聞かせいただきたい。

(森澤校長)

英語学習の動機付けというのもひとつでございまして、経済的な側面から見れば中国との関係、あるいは韓国との関係についても大事だと思いますので、固定的に考えずに、いろいろな方向性で探っていきたいと考えております。

あと、協議前で固まってはいたのですが、今後、四国内の既に国際協定を結んでいる学校と連携することによって、相互に学生が希望する分野に参加できる形を模索していきたいと思います。

(小松議長)

卒業生へのフォローアップの話がありましたが、よく「7・5・3」中卒者の7割、高卒者の5割、大卒者の3割が3年以内に仕事を変えてしまうと言われますが、高専卒業生の仕事の定着率はどうですか。

(谷口副校長)

ちょっとそこまでは確認していないのですが、卒業生に対するアンケートを定期的に行っており、その中の学校に対する要望で「授業でこんなことを教えて欲しかった。」等の調査結果が出ており、それをできるだけ反映していけるように考えております。それからあと、卒業生が何らかの理由で地元に戻って来たいという、Uターン希望者がときどきいます。そのような学生に対しては、四国のUターン希望者の就職支援事業等を行っている四国生産性本部というところがあって、それに新居浜高専も参加し、支援を行っています。ただ、定着率についての調査は実際には行っていません。

(小松議長)

愛媛大学の県内へ就職する学生の数も比較的少ないのですが、3年以内に都会に行っても辞める学生が結構いるのですね。ですから、3年は指導教員が面倒を見て、相談に乗るように、次に就職する場合は、なるべく県内に帰ってくるように指導すべきであると言っています。愛媛大学も愛媛にある大学なのだから、愛媛の発展を担う人材を育成するのが

我々の最大の任務だと思っているのです。そうでなかったら、愛媛大学は愛媛になくていいと思うのです。新居浜高専も、多分そうだと思うのです。新居浜高専も地元の人材を育成しないのであれば、新居浜にある必要がないと思います。そのくらいの意識でやる必要があると思います。そうは言っても、親がそれを許さないというのはありますけれど。大企業に行け、というのがありますよね。まあ、そういう点で、意識を変えていかなければならないというのはあるのでしょうか。大学の教員には、地域への就職を勧めるように言っているのです。そうやって、大学文化を変えていく必要があるのではないかと思いますのですけれど。

それから、今の学生はメンタル的に非常に弱いところがありまして、非常に悩みを持っていて、メンタルヘルスケアというものが非常に大事なものの一つになっているのですが、その辺はどうか。

(森澤校長)

学生相談室というものを設けておりまして、そちらの方で、年に3～4回、教員を集めて研修会を行ったり、機構本部でメンタルヘルス研修会が行われたりするので、そこへ相談室の教員や新任の校長が参加して、いろいろな情報を仕入れ、いろいろな相談に資するように努めております。

(小松議長)

増えていませんか。

(谷本学生主事)

メンタルヘルス関係で、問題のある学生は実際に増えております。そこで、学生相談室が中心となって対応し、学外からもカウンセラーを3人招き、カウンセリング体制を整えております。

(塩田 北山委員代理)

J A B E Eについて、新居浜高専はずいぶん早くからJ A B E Eに取り組まれていて、私の記憶では応用化学が2003年くらいでしたでしょうか。もっと早いのですか。

(早瀬専攻科長)

今年度、継続審査を受けましたので、それくらい経ったところです。

(塩田 北山委員代理)

あと、生産工学・電子工学と先生方も非常に努力されていると思うのですが、このあたりで、先ほどの求人倍率等、非常に高かったと思うのですが、そういうのは、産業界の評価というものが関係してきているのでしょうか。

(早瀬専攻科長)

J A B E Eの知名度という点では、それほどではないと感じています。それよりは、全国の高専で、専攻科数が増えてきているので知名度が上がってきて、求人が増えてきていると、私は個人的に思っております。

(塩田 北山委員代理)

ありがとうございました。

3. 機関別認証評価の結果

(佐々木委員)

総合評価として、格付けが各高専についてされるものなのですか。他の高専と比べてどうかというような、相対的な評価などもされるのですか。

(塚野点検専門部会長)

総合的な評価というものはございません。受審した高専ごとに優れた点等の記載が発表されるということです。

(佐々木委員)

では、高専ごとに、Aが何個でBが何個というようなことではないのですか。

(塚野点検専門部会長)

そうですね、具体的には、こういう優れた点がありますということで評価書に記載されています。

(森澤校長)

認証評価自体の目的が、そもそも高等教育機関としての基準を満たしているかという観点で行われて、順位付けというよりも、そういった角度で行われているのです。

(佐々木委員)

最近、自治体もよくランク付けされ、大学等もそういうランク付けの話がよく出るので、良いか悪いかはさておき、高専としてそのような横並びに見られるということはないのですね。

(塚野点検専門部会長)

そうですね。

(小松議長)

今までは、事前に評価して、大学等として出発していいですよというだけだったのですが、これからは、7年間に1回は事後評価を受けてくださいといったもので、大学等として基準を満たしているか、このままでいいかどうかということの評価するそれだけなのです。ただ基準を満たしていればいいだけなのです。ランキングとはまた違うのです。

改善すべき点は指摘されませんでしたか。

(塚野点検専門部会長)

先ほどお示ししました内容に則しております。評価書の中に記載されるということはありませんでした。

(小松議長)

そうですか。

(塚野点検専門部会長)

この認証評価は、基本的に優れた点の評価しようという姿勢で行われると聞いております。そして、改善点がありましたら、改善点につきましても、それを指摘して改善に結びつけて欲しいという方針で評価するということでございました。

(加藤 青野委員代理)

大変先進的な取り組みをされているかと思います。その中で、相対評価ではなくて、基準を満たしているかという絶対評価であるという話をお聞きした中で、例えば、他高専の優れた点等について、新居浜高専がそれを取り入れ、それに取り組むことによって、もっとも新居浜高専が素晴らしい高専になると思うのですが、その辺りの考えについてはいかがでしょうか。

(森澤校長)

やはり、現状にとどまることなく、常に改善に努めていかなければならないと考えております。

(加藤 青野委員代理)

資料No.3の2ページ目にある選択的評価事項A 研究活動の状況の優れた点で「知的財

産関連では取得したノウハウについて製品が発売されるなど、特色ある取組が行われている」という記載がありますが、これまでに、具体的に製品化されたものが分かればお教えください。

(川崎高技センター長)

これにつきましては、電子制御工学科の出口教授が I T 教材を開発して、秋葉原で販売しております。教材製作に関しては、高専は得意としており、大学などでは、なかなか手がでないということで、各方面で結構人気があります。この 1 件であります。

4. 地域と連携した教育活動の取組

(竹田委員)

小中学校に関係することですので、まずはお礼を述べさせていただきます。小中学校の理科等の出前講座につきましては、本当にお世話になりました。ありがたく思っております。愛媛県教育委員会も19年度から文部科学省の予算もありまして、特に理科教育に力を入れるということで、県の教育センターに事務局を置いて、各小中学校へ、特に実験関係で指導ということで強化しております。教育センターは松山ですので、周辺になりがちなのですが、今日話を聞いて、新居浜、西条地域の小中学校で、これだけの出前講座、出前活動をしていただいているということで、ありがたく思っております。そういう中で、非常にご苦労があると思いますので、そこら辺を質問したいと思います。特に、企画・運営というものは大変であろうと思います。あれだけ講座もありますので、企画・運営についての課題や、特に会を開くとなれば、案内の仕方、人集めの工夫、あるいは指導する先生方のご苦労もあろうかと思えます。そういう部分の課題があれば、お教えいただけたらと思います。よろしく願いいたします。

(川崎高技センター長)

先ほど申しあげましたコーディネーターが、中学校の理科の校長先生のOBでございます。この方は教育委員会とよく連携されておられ、この方にお世話になっております。これが第1のポイントでございます。もう1つのポイントは、実技研修会に来られている先生方に、主体的に出前講座への申請をしていただいております。小中学校の先生方への研修会と出前授業を連動させているということがポイントかと思えます。出前活動の実際の準備等については、学生を主体としておりまして、学生が事前準備に取り組んで、先生方は現場に行くだけというケースも多くあります。

(竹田委員)

企画・運営はどちらの方で立てられるのですか。

(川崎高技センター長)

企画・運営は、実行委員打合せとして毎週1回、1時間半ほど打ち合わせをしております。高技センターとものづくりセンターのセンター長、副センター長、濱田先生で打ち合わせをしております。

(佐々木委員)

私どもも、お世話になって、ありがとうございます。一つずつ聞いておりますと、私自身もよく承知していないようなものがあるぐらいたくさんあるという意味で、こどもたちと先生への取組をしていただいております。逆に、市の方へ要望、改善があればお聞かせ願いたいのですが。

(川崎高技センター長)

中学校の理科ですが、授業の時間割を変えることが難しいというポイントがございます。これは技術科も同じかと思えます。従いまして、中学校を増やそうと思っても、壁がございます。これにつきましては、新居浜高専の方で授業時間内に出られるような工夫をしなければならないのではないかと考えております。中学校につきましても、夏季実技研修会を開催しておりますので、先生方の一層のご参加をいただくと嬉しいかと思えます。

(佐々木委員)

小学校の方は、総合的な学習の時間が4月から減るようなので、理科の時間を使うということですか。

(川崎高技センター長)

はい。理科の時間を振り替えまして、例えば1組、2組、3組をまとめて、時間の振替をしていただいております。そういう意味では、ご迷惑・ご苦労をおかけしております。感謝しております。1回で広いところで1度に行うケースもあります。また、連続的に1組が1時限、2組が2時限といったように、1時限から4時限まで、同じテーマを続ける

ケースもあります。小学校の方では、時間の融通をしていただきまして、感謝しております。

（加藤 青野委員代理）

本当に、地域貢献という意味で、工都新居浜の未来を支える子どもたちに対する出前授業というものには、頭が下がる思いがします。そういう意味で、例えば、夏休みであるとか冬休みであるとか、特に中学校以降の理科離れが言われて久しいかと思います。やはり、実験は思考能力の向上につながっていくと思いますので、中学校の場合、特に難しい高校受験とかあるかと思いますが、是非、長期休みの期間を利用して、今後とも小中学校に対する出前授業の継続をお願いできたらと思います。

（川崎高技センター長）

今月で、事業は終了しますが、来年度以降も変わらず実施していこうと思っております。

5. 入学志願者の確保について

(竹田委員)

広報活動では、松山市内の学校を含めて学校訪問等していただき、ありがとうございます。また、資料もいただいて、生徒に渡すという形で周知をしていますが、やはり、決定的に生徒が自覚を始めますのが、9月の学校説明会です。これに出た生徒は、だいたい受験しているようです。そういうことがあって、受験する生徒が始めから自覚するというよりも、案外、親の方に情報があり、親が生徒に勧めて、そして本人が納得する形が、我が校にはあるようです。最終的には生徒も、ここに行きたいと希望して来ている訳ですが、そこら辺の入学してからの学生の入学の動機のようなアンケートがあれば参考にさせていただきたいのですが。

(谷口副校長)

そういう受験に関するアンケートにつきましては、毎年、新入生アンケートという形で実施しております。どういう動機で本校を選んだのかという項目では、親の勧め、自分で決めた、先輩に話を聞いて等があるのですが、その中でも、親の勧めという回答が上位であったように記憶しております。

本校の推薦基準を4.0から3.8に決めた訳ですけれども、推薦していただいた際に、中学校ごとにどの程度ばらつきがあるのですか。例えば、この中学校では4.0、同じ学力の生徒が別の中学校へ行っても、4.0なのか3.0なのか5.0なのか。そういったところがどうしても知りたいところなのです。

(竹田委員)

中学校によって状況も違うと思うのですが、基本的には絶対評価ということで、通信簿を5段階評価でつけることになっております。新居浜高専へ提出している県立入試と同じ一覧表を分析していただければ、学校によって、上下の違いがあるのが分かるのではないかと思います。5段階評定で比較して、推薦入試で採ろうということであれば、以前からのデータで比較できるかと思います。難しいかも分かりませんが。

(小松議長)

時間が非常におしておりますのでこの辺で終えたいと思いますが、最後に何か是非発言したいということがございましたらどうぞ。

(佐々木委員)

今の社会情勢で、先ほど竹田委員とも始まる前に、義務教育における給食費が納められない等という家庭が増えてきておりまして、高専もいろいろそういう制度があるのですか。家庭の事情で学業が続けられなくなると、奨学金や貸付制度があるのですか。詳しいことは知らないのですが、何とかそういう事情がある学生がいたら、いろいろな形で支援していただければと、お聞きしたいのとお願ひでございます。

(谷本学生主事)

毎年、授業料免除を行っております。だいたい全額免除ということで、数十名ほど免除しております。そして、奨学金につきましては、様々な奨学金がございますので、緊急奨学金と併せて紹介しております。実際のところ、本校学生の家庭の経済状況が厳しいものがあるという学生も増えておるようです。

(小松議長)

それでは時間になりましたので終わりたいと思います。全体の印象では、非常に多彩な教育、研究、地域連携の活動がなされているし、広報活動にしても、入試、受験生のための活動を非常によくやられていると思います。ただ残念なのは、せっかく集めた学生を地元ではなく、都会に送り出すということです。これは非常に残念なので、我々も一緒に努力したいと思います。

それでは、本日の運営諮問会議を終了したいと思います。どうもありがとうございます。